

日本災害復興学会設立 10 周年記念企画  
「復興を考える連続ワークショップ」最終討論会  
議事録

2019 年 3 月 2 日（土）13:30～17:00

於：関西大学東京センター

【参加者数（講師含む）】

30 名

【復興とは何かを考える連続ワークショップ・スタッフ】

永松（企画委員長）・小林（企画委員・連続 WS 幹事）・山崎（学生スタッフ）

議事次第

1. 開会の挨拶（大矢根日本災害復興学会長）
2. 【第一部】報告者レビューと問題提起（司会：永松企画委員長）
3. 【第二部】総合ディスカッション（司会：永松企画委員長）
4. 閉会の挨拶（中林特別顧問-前学会長）

1. 大矢根学会長より開会の挨拶

大矢根会長より、本ワークショップ（以下 WS）開催の背景やその意義等について説明がなされた。本 WS の前身である「復興とは何かを考える委員会」には、各研究者が自身の研究を位置付けることを助け、またそこでの議論の成果を踏まえて多くの論文が執筆されるなどの意義があった。日本災害復興学会の 10 周年記念事業の中核である本 WS は、各人が再度自身の研究を位置付け、今後の 10 年に向けて理論的な視座を獲得する場であるものと考えている。

2. 【第一部】報告者レビューと問題提起要旨

第一部では、まず、小林幹事・山崎委員より、本 WS においてこれまでに登壇した講師のうち、本討論会を欠席した 8 名の講演の概要について、代理報告（各 2 分）がなされた。

なお、下表に示した各報告のテーマは企画委員会が便宜上付したものであり、講演タイトルとは異なる。

講師名 (敬称略)	報告テーマ	担当
加藤孝明 (東京大学)	四川地震からの復興／都市開発と復興	小林
近藤民代 (神戸大学)	ハリケーン・カトリーナ／住宅から復興を捉える	小林
矢守克也 (京都大学)	四川地震からの復興／世直し・立て直し・やり直し	小林
田中重好 (高岡学院大学)	インド洋大津波／復興研究を体系化するために	小林
尾松亮 (関西学院大学)	チェルノブイリ原発事件／国家賠償と“その土地で暮らす”ということ	小林
Liz Maly (東北大学)	ハリケーン・サンディからの復興／アメリカにおける住宅復興アプローチ	山崎
益子智之 (早稲田大学大学院)	ラクイラ地震からの復興／イタリア震災復興の歴史的展開プロセス	山崎
原口弥生 (茨城大学)	ハリケーン・カトリーナからの復興／地域社会とレジリエンス	山崎

つぎに、本討論会に出席した講師7名を含む12名の登壇者から、論点整理のための報告レビューと問題提起が、各5分でなされた。

それぞれの報告テーマは、下表に示す通りとなる（※については、企画委員会が便宜上付したものの）。

報告者名	報告テーマ
木村周平 (筑波大学)	現代日本における「災害復興」の何が問題か
清水展 (京都大学)	※ピナトッポ火山噴火からの復興、「新しい人間・民族・社会」を生み出す「生みの苦しみ」としての自然災害
林勲男 (国立民族学博物館)	※アイタペ津波災害からの復興、歴史的・文化的コンテクスト、特に政府とカトリック教会の“綱引き”に着目して
桐谷多恵子 (長崎大学)	広島・長崎の復興研究
杉安和也 (東北大学)	2013年フィリピン台風30号ハイエンの被災・復興状況報告 ―復興における国家対応およびセブ島・サマル島における住宅復興支援―
岡村健太郎 (東京大学)	※歴史的視点から見た三陸津波と災害復興制度、昭和三陸津波の復興手法から近代復興のあり方を再考する
西芳実 (京都大学)	復興を考える ―「災害対応の地域研究」からの提言―
小林秀行 (明治大学)	クライストチャーチ地震における意見集約事業の実際
山崎真帆 (一橋大学大学院)	「被災者じゃないけど被災者」と復興
坂口奈央 (東北大学大学院)	現代日本における「災害復興」の何が問題か
上村靖司 (長崎技術科学大学)	復興とは何か ―復興のモノサシ、復興熟度チャート、課題解決と主体形成、Negative capability
大矢根淳 (専修大学)	現代日本における「災害復興」の何が問題か

### 3. 【第二部】総合ディスカッション

第二部冒頭では、小林幹事より、各回WSにおける議論を整理したうえで、論点提示がなされた。

まず議論の前提として、WSにおいては、他国の事例（そもそも「復興」という言葉自体を有していない地域・国も多い）等を吟味する中で、「復興」という概念が日本独特の考え

方・言説であることが参加者の間で共有されたことが指摘された。小林幹事は、そのうえで、WSの議論から抽出できた日本の「復興」の特色を5点に整理し、議論に通底していた論点として、下記の4点を提示した。

- ① 被災者主体の復興は現実的にどこまで可能なのか、どこまで必要なのか。
- ② 復興が、“build back better”であることは前提になるのか、「手仕舞い」も含めた選択肢の存在が、むしろ必要ではないのか
- ③ NPOも含め、主体を権力化させない方法はどうすれば実現するのか、ある一主体が顕現をもった途端に、それ以外を押しつぶしてしまう
- ④ 日本の復興は、何を引き継いで前提にしてきたのか、逆に引き継がれていないもの、議論されていないものは何なのか

次に、上記の論点を踏まえつつ、会場全体で議論を行った。以下に大まかな議論の展開を示す。

#### <議論の展開>

—議論すべき論点があれば挙げてほしい（永松企画委員長、以下同）

- ・「産業・仕事・生業」の復興といった観点からの議論が不十分であったように思う
- ・災害の拡大要因としての脆弱性、その除去と復興を絡めた議論が不足しているのでは。「復興において安全性というものをどこまで担保していくか」という議論も関連してくる
- ・これからどうするのか、何を目指すのか、という「前向き」の復興論に対し、実態、経験を振り返るという意味での「後ろ向き」の復興についても議論していくべきではないか
- ・復興を目指して進んでいく際の「ふるさと」という問題について、どう考えればよいのか
- ・近年、日本地域経済学会では、「人間の復興」に代えて「人間性の復興」という言葉を使うようになりつつある。本学会においても、人間性そのものなり方も検討してはどうか
- ・どの観点から、だけでなく「どの立場から語るのか」、すなわち被災者や支援者、研究者に存在する差異、グラデーションのどこに自身を位置付けるのかという点も重要では
- ・復興の「終わり」をどう考えていけばよいのか。示すべきか、示さないべきか含め
- ・「どのようになれば復興ではなくなるのか」という逆の視点からも考えてはどうか

—なぜ我々は「復興」という言葉をあえて使うのだろうか。「復興」に込められた意味とはなにか。また、WSにおいて、「復興」の言葉に、防災、脆弱性の再生産を防ぐといった観点をも織り込んでいくという考え方も、日本固有のものではないか、という議論があった。文化人類学、地域研究の視点から、どう捉えられるか

・復興とは、打ちのめされた被災者が、立ち上がってふらふらと歩きだし、さらに歩みを進めていくことを指すのではないか。このように被災者個人々人を中心に考えると、やはり生業、いかにして「飯を食っていくか」ということが関連してくる。

・人々を土地に縛り付ける、というのが100年単位で続いてきた日本の社会的特性であるが、「復興」もその惰性で考えているため、土地と結びついた「地域の復興」が問題になる。政府に財政的な余裕がない東南アジアでは、被災者が自ら動いていく災害に対応していく。日本においてもこの窮苦の時代にあっては、被災者の視点で考えることが重要ではないか

・東南アジアには、復興という考え方を積極的に取り入れようという新しい動きがある。復興概念を導入することで、これまで見過ごされてきた独立戦争や革命等における被害から回復していく過程を、災いへの対応として可視化しようとしている。日本社会の「復興」へのこだわりにも、何かしら意味があるだろうし、そこを考えていくことが重要なのでは

・トルコの人々は、災害に限らない様々な問題に対して、人々のネットワークを通して、場合によっては地域を移動しながら対応する。日本の人々も、移動で問題へ対応していく側面を有しているが、他方、定住、戻ってくることに価値を置くので、他国の事例をもって移動型が良いと言い切ることはできないのではないか

—「復興」という言葉について。住民側から出てきたのか、行政の側からか。誰のための「復興」か、「復興」はどのように語られてきたのだろうか

・興の字には面白いがる、という意味がある。住民の肌感覚からすると、「面白くない」から「復興していない」のではないかと思う。復旧と復興の違いを説明されてもよくわからない

・移住を選択した人々の生活再建は、もはや「復興」という枠組みでは語られない。これは誰にとっても復興か、という問題とも関わってくると思う

・先ほどの議論とも関連するが、被爆直後の広島において、再びここで生きるぞという意志、覚悟を示すために人々が「復興」を用いたように、やはり「復興」の持つポジティブな側面が、日本の人々にその言葉を使わせたのではないか。一方で、行政側が「復興」を用いることで、そのポジティブな意志を回収していった部分もあるのでは

・復興には日常生活や生業、住まいといった「被災者復興」と、どこに住むのかということに関わる「被災地復興」という二つの枠組みがあり、両者は複雑に絡み合っている。研究者のなかでも両枠組みは混在しているところがあり、全被災者が対象となる「被災者復興」が、ある非常に限定された被災市街地をどう復興させるか、という「被災地復興」の問題に押し込まれてしまう。この二つを分けて議論していくことが重要なのではない

—「被災者復興」「被災地復興」の間には緊張関係が見られるのではないか。またこの問題は、被災地、被災者の範囲はどこまでなのか、という論点にもつながってくる。人々が自らを「被災者である」と定位すること背景に、どのような考えがあるのか

・旧庁舎の保存／解体が問題化した大槌町では、解体を望む人が「覚悟」という言葉を非常によく口にした。「被災者復興」「被災地復興」の緊張関係において、被災者のなかに「覚悟」が生まれる、と考えることはできるかもしれない

・自分は北海道南西沖地震で被災したが、家族や家が無事であったため、今でも被災者であると自称することはできないし、経験を語ることも申し訳ないと感じる。一方原発事故により広域避難を強いられた人々のなには、避難先での生活が確立し、「私たちはもう避難者、被災者ではない」という人もでてきた。すなわち、自分をどう捉えるか、被災者として捉えるかどうか、という点については、被災の程度と時間の経過という部分が関わってくるのではないか

・「被災者」の範囲に関する議論は、何か本質的な要素が見出されて、その有無で二分されるという点で、人類学における「民族とは何か」という議論と非常によく似ているのではないか。この問題に対応する戦略としては、多様な線引きの存在を明らかにすること、敵をつくるなど物語を共有することが想定される

・東日本大震災が広域災害であったことが、被災地・被災者という線引きのしにくさの背景にあるのではないか。例えば、沿岸部からすると仙台は被災地ではないが、同市の住民の被災程度は様々であり、被災したことを表立って言えないと感じる人もいる。一方で、被災者・被災地という要素は、被災された人の一側面なのであって、全てではない。こうした被災という複雑な事象については、宮地尚子先生の「環状島」の議論がその理解を助けてくれる

・南相馬市やいわき市では、住民間、住民と避難者間で強制避難の有無とそれに付随して賠償金の有無や多寡といった分断があり、避難者が差別感を感じる等人間関係が非常に悪くなったという。心理的観点から復興というものを考えることも重要だ

・各自治体の地域防災計画における「復興」の記述は短いうえに抽象的で、行政が復興をリードすること自体難しい。こういった復興に関する議論を、行政マンが理解できるようかかたちでまとめていかなければならない

—これまでの議論を受けて、発言したいことがあれば

・「被災者復興と被災地復興」の区分に対し、「被災者の生活再建と被災地復興」と言葉を分けた議論も聞かれた。両者を「復興」という言葉で語るメリットとデメリットを整理すべき

・住民がいない被災地や、ある程度いる被災地が存在する福島の事例で考えると、被災者と被災地をいったん区別することには意味があると感じる。この問題に対し、二重住民票や二重の地位、といった考えを提示してきたが、近年は、こうした考えに本腰を入れて、法制度の観点から考えていこうとする雰囲気が出てきている

・流動性が高く、発災後は被災地域への外部者の流入が進む東南アジアの事例で考えると、被災地・被災者の区分は重要だと感じる。日本については、両者が一体となってしまう傾向があるのでは

・日本社会は、平時は復興マスタープランづくりに取り組めず、被災してはじめて「どうしよう」と考えだし、被災者の気持ちが揺らぎ続けるなかで、悩みがちである。平時の、穏やかな気持ちでいる際に、計画をつくることができればよいのではないかと思う

#### 4. 中林特別顧問より閉会の挨拶

中林特別顧問より、本討論会における議論を振り返りつつ、閉会の挨拶がなされた。中林特別顧問は、酒田大火をきっかけに防災まちづくりに取り組み始めたとともに、酒田市の大きな被害を目の当たりにし、復興というものについても向き合うこととなった。

本討論会における議論、まずは復興における二つの枠組み「被災者復興・被災者復興」については、現行の行政制度の下ではそれぞれを担当する部署が異なること、両者をつないでいくような体制が必要であることが指摘された。また、「被災者」の範囲に関する議論について、現在は、支援や補償といった政策的なものの線引きによって「被災者」が“ゼロかイチか”で規定されること、その間を埋める発想が必要で、そこに復興基金が使われるべきであること、そして、支援を公平公正に展開していくための新しい「被災者」の定義が必要であること等が主張された。最後に、「復興はもとより負け戦である」という意見に対し、何も準備していないからこそ「負け戦」なのであって、事前復興の取組を進め、犠牲者が出てから復興するのではなく、犠牲者を出さない復興に向かうべきではないか、との指摘がなされた。